



TITLE:

元の懿州城南學田碑拓

AUTHOR(S):

田村

CITATION:

田村. 元の懿州城南學田碑拓. 東洋史研究 1937, 3(2): 155-155

ISSUE DATE:

1937-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145595>

RIGHT:

するにあたらぬ。

漕運は國都の食糧問題と必然的關係を有するものであるから、政治經濟方面の諸問題と關聯して考究さるべきは勿論、漕路の状態、その變遷、運輸方法等人文地理學的考察は尤も重要である。又運米の途次に於ける運賃の問題、舟人の不正、侵盜、へり米の對策等の闡明、及び漕運によつて釀成せられる社會問題の研究も等閑に附することは出来ない。以上は漕運問題の有する多面性であり、研究の興味も困難も實にこゝに存

するのである。かく考へ來れば、我々は以上諸論文に於ては未だ充分なる満足を得ることは出来ないであらう。又各時代のそれが充分に究め盡されたとしても、まだ／＼問題は盡きない。更に各代を通じて漕法の變遷、漕運當事者の性質、脚錢の増減等の諸事項に關して比較研究を試みたならば、そこに時代々々のもつ特殊の色相が看取せられるとともに、時代の動きといふものが感知せられるであらうと思ふ。該問題の研究の領分はなか／＼廣い。

—昭和十二年十一月二十日—

元の懿州城南學田碑拓

遼・金・元三代を通ずる懿州の地が、何處に比定さるべきかは、嘗て箭内互博士が滿洲歴史地理第二卷^{自二七五頁至二九五頁}に於て精緻なる考證の末、これを今の彰武縣城と考定されて以來、衆説は多く之に歸してゐたのであるが、曩に園田一龜氏がその著滿洲金石志稿第一冊に阜新縣志所收元の元統二年懿州城南學田碑^{錦州省阜新縣の東北}を載録して以來漸くその所在を明證されるに至つた。たま／＼頃日滿蒙史研究家として知られ、且つ又大金得勝陀頌碑の再發見者として有名なる須佐嘉橘氏は萬難を排してこの地に至り、本碑の手拓に成功されて吾等は創めてその拓影に接するを得た。これによれば、阜新縣志及び滿洲金石志稿所録のものは——從來如何にしても意味通ぜず、解讀不能の如く思はれてゐたが——實は碑文の下部七・八字を全行に亘つて缺如してゐたことを知りうる。従つてこの點よりしても須佐氏の學界に對して寄與された功は決して尠しとしないであらう。因みに、碑石の大きさは縦約五尺八寸、横約三尺四寸。その他この碑に關する詳細は手拓者自身の報告に俟つことゝし度い。(田村)